

暴風域

連作小説 1

唯野未歩子

別れるとき、旬くんとあたしは毎回、嵐のように泣いた。「八回ふられても嫌えない」と彼は泣く。でも、あたしは知っている、これはあたしの片思いだということを。

灰色の空のした、レモン色の小型車が、水しぶきをあげる。あたしのまえに停まり、小雨に濡れるのも気にしていないようなそぶり、匂くんは降りてきた。

「怒ってる？」

いつものように、そう訊ねる。

まさか、というふうには、あたしは目を丸くしてみせる。匂くんが後部座席のドアを開ける。あたしの手からビニール傘を受けとり、丁寧にたたんで、水滴をふり落とす。車に乗りこもうとすると、雷が鳴る。空が砕けちったかのような音量の、まるで一枚のお皿が粉々になったみたいな響きを、あたしたちは同時にみあげる。

「光らないな」

匂くんがひとりごちる。

日曜日。

東京は大雨洪水警報が発令されている。十月も終わりだというのに、台風が直撃しているらしい。匂くんは台風が好きだ。というよりも、自分を熱狂させてくれるものが好きなのだろう。プロレス、スポーツ観戦、野外ライブ。それらが与えうる刺激と興奮。生々しさ、激しさ、そして一体感。匂くんにとっては、恋愛も、そういうもののひとつなのだろうと、あたしは思っている。

今朝、あたしの携帯電話には、午前九時と午前十時に着信履歴があり、メールは六件届いていて、いずれも匂くんからのものだった。

開いてみると、

「外みた？ すげえ！ 海みにいこうぜ！」

「おーい起きろ。百歩譲って、築地の海でもいいぞ」

「ってか、無視？ あ。電車だと、たるい？」

「OK。いまから、車、借りられそうです」

「くはー。びしょびしょだ。待たせたね。ドライブしよう」

「あきらめ悪くて、ごめんな。これからも、いい友だちでいたいんです」という文面だった。

正午まで眠っていたあたしは混乱しつつも、

「いま起きた。二時でどう？」

と慌てて返信したのだった。

助手席は、知らない誰かの工具箱やフリスビーや画材道具が、山積みだった。後部座席には、トリスト色の犬の毛がこびりついている。防臭剤がきつく、外国産のチューインガムみたいな、甘ったるい匂いがした。

「どこにいくの？」

後部座席から、あたしは訊いてみる。

「杏のいきたいところ」

運転席に座り、匂くんがエンジンをかける。

行き先なんて思いつけない。あたしは困って、正面をみやる。